

交流からふくらむ新たな価値を見つけて

ふれあいをパワーにして前進する玄海町



修学旅行(中学生)の民泊受け入れをきっかけに、いま住民が、町が、みるみる活気づいている。多彩な自然に恵まれた風土を活かしながら、様々な交流を通じて未来を模索する玄海町の活動をクローズアップした。



【写真】
 中央：浜野浦の棚田で挙げられた結婚式
 ①：「恋人の聖地」に認定された浜野浦の棚田
 ②：展望台の鐘付きのモニュメント
 ③：ATA事業の体験プログラム「養殖場での給餌体験」
 ④：漁業を交流プログラムに組み入れる
 ⑤：上場地域で収穫される「棚田米こしひかり」
 ⑥：浜野浦の棚田で売られている「らぶ絵馬」
 ⑦：佐賀牛の牧舎での給餌体験

概要

「唐津くんち」や唐津焼などで知られる唐津市に囲まれた玄海町が、ここ数年前から交流事業に積極的な活動を見せ始めた。修学旅行生民泊での盛り上がり、地元の魅力の見直し、住民グループの結成、新しい観光交流拠点の建設計画など…。なぜ、いま町は交流事業に力を入れ出したのか、こうした事業はどんな効果をもたらしたのか、そして将来にどんな展望をもっているのか。町の現状と取り組みの本質に迫る。

CHAPTER 1 (P.8)

町を自覚めさせた修学旅行生の民泊

宿泊する生徒たちとの交流で、いきいきとしてきた住民たち。そもそも修学旅行生の受け入れを始めたきっかけは何か、その内容はどんなものなのか。この活動に町や住民はどう取り組んでいるのか。民泊は町を活気づけるとともに、どんな効果をもたらしたのか。

CHAPTER 2 (P.9)

外からのエネルギーをパワーに変えて

玄海町での体験に驚き、喜び子供たちを見て、住民は何を考えたのか。民泊を現場で支える人たちはどんな活動をしているのか。交流という取り組みの中で、町の代表的な観光資源である棚田を守る人たちの思いとは。観光交流と結びつけた棚田のバックアップ法とは。

CHAPTER 3 (P.10)

人・もの・心を結んで大きな明日を

まちおこしに大切なのは、まず地元の魅力を再発見し、町の資源、ひとつひとつを結んで大きな資源にすること。町の発展と住民の幸せのために、行政は外部との交流をどう捉えているのか。そして将来のためにどんな方策を考え、進行させているのか。

唐津観光協会のATA事業 (Area Tourism Agency)

観光には、地元の人を外部へ連れて行くアウトバウンド型と、外部の人を地元へ連れてくるインバウンド型がある。(社)唐津観光協会では、着地型観光と呼ばれるインバウンド型の促進を目的として、平成19年4月にATA事業部を設立し、旅行業第三種(国内旅行)の登録をした。

その活動の柱のひとつとなっているのが、現地体験型の修学旅行。唐津・玄海エリアには海・山・川などのバラエティに富んだ自然があり、大陸との交流文化の歴史があり、都会にない人々の暮らしがある。これらの魅力を活用し、エリア内の農山漁村での民泊を軸に様々な「体験プログラム」をオプションとして、中学・高校の修学旅行を誘致している。

すでに平成21年度には、関西・関東から約2,400人の生徒が唐津・玄海エリアを訪れ、今年度は4,000人に達すると予測されている。エリア内でもとくに修学旅行の受け入れは、玄海支所が盛んである。

【主な「体験プログラム」】

- 玄界灘での船釣り ■イカの一晩干しづくり
- 地引き網体験 ■いちごジャムづくり
- 牧場見学と佐賀牛を使ったマイバーガーづくり
- イカダによる川下り ■養殖場での鯛のエサやり
- 秀吉のつくった名護屋城めぐり など



牧場見学と佐賀牛を使ったマイバーガーづくり



魚のおろし方を学ぶ



玄界灘での船釣りを楽しむ

町を目覚めさせた修学旅行生の民泊

生徒たちとの交流で盛り上がる
玄海町

5月から6月の修学旅行シーズン、玄海町はにわかに活気づく。大勢の中学生が、体験民泊で町へやってくるからだ。生徒たちを受け入れるのは、町内にある普通の民家。農家や商家もあれば、漁師の家もある。それぞれの家に3〜4名ずつ振り分けられた子供たちは、家族の一員として家業の手伝いをするこも。たとえば畑仕事をしたり、漁船の掃除をしたり：そして一緒に食事をして語りあう。その他にも魚釣りやイカの干物づくり、いちごジャムづくりなどのプログラムで、玄海町の魅力を体験できる。都会では味わえない田舎暮らしに、子供たちは大喜びだが、喜んでるのは彼らだけではない。受け入れる住人たちも、純真な笑顔や驚く姿にパワーをもらい、町



(社)唐津観光協会 ATA事業部
事業部長 古賀道伸さん

がいきいきとしてきたのだ。

きっかけは唐津観光協会の
ATA事業

平成19年、唐津観光協会がATA事業を立ち上げた。その活動の一環として推進されたのが、現地での民泊を中心とした体験型修学旅行の誘致だった。

「唐津・玄海エリアは、多彩な自然環境と大陸との交流の豊かな歴史を持ち、しかも福岡や長崎といった大都市の中間地点に位置しており、教育旅行の行程を組みやすい。まさに修学旅行を呼ぶのにぴったりなのです」と語るのは、唐津観光協会ATA事業部事業部長の古賀道伸さん。協会は、唐津・玄海地区の魅力を牽引する様々な体験プログラムを開発。これをオプションとした民泊付きの修学旅行を企画した。民泊のノウハウについては、先進地域として知られている大分県安心院町グリーンツーリズム研究会や南信州観光公社を視察したという。基本的な取り決めとして、生徒1人当たりの料金は1泊2食付きで6000円。1軒に宿泊する生徒の数は4名程度で、食事・風呂は民家が負担する。決し



玄海町役場 産業振興課
課長 小野茂行さん

て収入は多くないが、お金には換えられない喜びがあり、一度生徒を迎えるとまた呼びたいという民家が多いという。また子供たちにも好評で、体験型修学旅行は人気を呼んでいる。

「他のエリアでも受入民家が増えています。玄海町は盛んになっていますね。今は修学旅行がメインですが、将来は一般客をターゲットにした体験型民泊ツアーにも本格的に取り組んでいきたいと考えています。外から人が入ってくることに経済効果は、やはり大きい。飲食店や土産物屋、バスやタクシーなどの交通といった様々なサービスなど、地域内でビジネスがふくらんでいきます」と、古賀さんはますます意欲的だ。

地元への意識の高まりが
町と地域をつなぐ

玄海町が修学旅行の受け入れを始めたのは、平成21年（昨年）の5月。年間の民泊受入軒数は55軒だった。

今年70軒が登録しており、4月から6月までに718名の中学生を受け入れている。

「今年と同じ上場地区と呼ばれる近隣の旧3町（呼子町、鎮西町、肥前町）で一緒に受け入れている状況です。当初は民泊の話を持ちかけても、なかなか引き受けてくれる家はありませんでした。ところが一度やってみると、楽しくてまたやりたいたいという家が多く、クチコミでどんどん広がっています」と語るのは、玄海町役場産業振興課長の小野茂行さん。役場も補助金などで修学旅行の受け入れをバックアップしている。また、この活動を住民の側から支えているのが、数年前から各所で結成された「まちおこしグループ」だ。現在、町には「玄起海」「都玄海」など、7〜8の住民グループがある。農家から勤め人までメンバーの職種は様々で、40代から50代が中心になっている。

「修学旅行生の受け入れは、住民を活気づけました。それとともに気づいていなかった町の魅力や、町の将来のことを、自分たちで考える



民泊受け入れ先での食事。田舎ならではの家族大勢での食事に都会の子供も食が進む。

機会になったことが大きいですね。さらにこの取り組みは町内の人と人をつなぎ、玄海町と近隣の町とを

つなぐ役割も果たしていると思えます」と、小野さんは民泊による交流の効果を語る。

CHAPTER 2

外からのエネルギーをパワーに変えて

子供たちの驚きが喜びとなり 励みになる

「町では普通のことには子供たちが驚くので、こちらもびっくりです」と楽しそうに話してくれたのは、唐津玄海体験型旅行受入推進協議会の溝上孝利さんだ。住民グループ「玄起海」の副会長でもあり、自らも生徒たちを受け入れている。たとえば近くの空地で花火をするとか、釣ってきたイカをすぐにさばいて料理するとか、お爺さんお婆さんや幼い子も一緒に、家族大勢で食事をするなど、何でもないことに都会の子供は大喜びするという。

「そもそも初めて会った他人から、家族のように接してもらおうことがう



唐津玄海体験型旅行受入推進協議会
みぞうえ たかし
玄海支部長 溝上 孝利 さん

れしいようです。人と人とのふれあいに飢えているのかもしれないね。たったの1泊2日なのに、最後は涙の別れになることも多いですよ。帰った後にも感謝の手紙や作文が送られてきたり、中には礼を言うために親御さんと共に再訪問してくれることもあります。もう、やみつきになってしまいます」と溝上さんは語る。また一方では受入民家同士の横のつながりもでき、体験プログラムを工夫するアイデアの交換が行われるなど、新しいコミュニティも生まれている。

ATA事業部の玄海支所が 現場をサポート

住民たちの生徒受け入れを現場でサポートしているのが、唐津観光協会ATA事業部・玄海支所のメンバーたちだ。民家への受け入れのお願い、各家庭への生徒の振り分け、歓迎式・解散式の実施、体験プログラムの調整、移動の手配や場所の確保など、細かな実務作業を受け持っている。



(社)唐津観光協会 ATA事業部・玄海支所
わきやまなるみ
脇山 成美 さん

玄海支所の脇山成美さんはこう語る。「事務的なことだけでなく、持病やアレルギーがないか、苦手なペットがないかなど、泊まる子供たちの情報を事前に受け入れ先の家庭にお知らせする心配りも、大切な役目のひとつです。子供たちにとって修学旅行は大切な思い出。受け入れ作業はいろいろと大変ですが、玄海町を知ってもらい、喜びにあふれた顔を見ることで十分報われます」

修学旅行の民泊（1泊2食）では、生徒1人当たり4800円が受入先に支払われる。商売としてやるわけではないが、や

＊「浜野浦の棚田」と「上場産こしひかり」

平成11年に「日本の棚田百選」に認定された浜野浦の棚田は、戦国・江戸時代から山を切り開き、石を積み上げて作られてきた。現在283枚の棚田があり、平均勾配は1/7（7m進んで1m上がる）、総面積は11.5ヘクタール。玄海町を縦断する国道204号沿いには展望台が設けられ、その壮麗な景観が一望できる。玄界灘に沈む夕陽が田の水面をオレンジ色に染める春の景色、蒼い空と海に黄金色の稲穂がコントラストを成す秋の景色など、四季折々に魅力ある姿が楽しめる。

玄海町のある東松浦半島の北部台地は“上場台地”と呼ばれ、この地域の棚田で作られる早期米（8月中旬出荷）は、美味な「上場産こしひかり」として知られている。とくに浜野浦の棚田で作られる米は、朝晩の寒暖差の大きさ、海からミネラルをたっぷり含んだ潮風を受けるなど、おいしい米ができる条件に恵まれており評判が高い。



上場産の「こしひかり」の刈入れ作業

町屈指のビュースポット 「浜野浦の棚田」を守る

玄海町はこれまで、あまり積極的に観光交流事業に取り組んでこなかった。その中で先駆的に行われたのが、平成13年から3年間にわたる

はりお金が入ることは住民の励みになっているともいう。始めてまだ2年目。今は盛り上がりつつあるが、これからが大事だと脇山さんは気を引き締める。



浜野浦棚田組合
組合長 吉田 豊 さん

「浜野浦の棚田周辺の整備事業」だった。浜野浦の棚田は、日本の棚田百選に認定されたビュースポットで、観光客用に周辺の展望台、連絡歩道、駐車場、公衆トイレなどの整備が行われた。その時に棚田の持ち主たちによって、棚田とその景観を守るために結成されたのが「浜野浦棚田組合」である。「棚田は1枚当たりの面積が狭く、形も不揃い。大型の機械は使えないので、植え付けにも収穫にも時間と労力がかかります。たとえば高齢で作業が困難な場合は近くの組合員が作業したり、みんなで農道の管理をするなど、助け合って棚田を守っています」と語るのは、浜野浦棚田組合組合長の吉田豊さん。組合では他にも、展望台からの景観に配慮して菜の花の種を蒔いたり、小学生の体験学習のために棚田でソバを栽培し、収穫・粉挽き・試食会を開催するなどの活動で棚田の保全に努めて

きた。しかし若い世代の農業離れ、米作りの採算の問題などで耕作放棄地が増えているのが現状だ。

「このままでは棚田がなくなってしまう。長い時間をかけてつくられた美しい景観が失われられないよう、住民グループと町の行政が力を合わせて守らなければならないと思います」と吉田さんは熱く語る。玄海町でも棚田のオーナー制や、おいしい棚田米としてのブランドづくりなど、棚田保全のための様々な取り組みが検討されている。

棚田を観光名所「恋人の聖地」としてバックアップ

浜野浦の棚田の魅力を、観光交流と結びつけて活かす取り組みも進められている。平成19年4月、デザイナーの桂由美や華道家の假屋崎省吾らで構成される選定委員会が「プロポーズにふさわしいデートスポット」として選んだ「恋人の聖地」のひとつ（全国100カ所中の44番目）に、浜野浦の棚田が認定された。これを機会に、町と観光協会、そして地元の若い主婦たちによって結成された「玄海町恋人の聖地プロジェクト」がスタートした。修学旅行生の民泊受け入れで活躍している、玄海支所の脇山さんもメンバーの一人だ。展望台にはハートを象った鐘付きのモニュメントを町営で設置してい

るが、そのデザインを手がけたのも、脇山さんを含む7人のメンバーだ。

「ハート形のらぶ絵馬（300円）やお守りらぶばわ（500円）も、メンバーが手づくりして販売しています。訪れるのは、やはりカップルや若い女性が多いですね」と脇山さん。正面の海に落ちる夕陽が田の水面に映える5月上旬には、10日間で約3000人がやってくるという。

CHAPTER 3

人・もの・心を結んで大きな明日を

様々な交流は、まちおこしのきっかけ

原子力立地市町村である玄海町は、現在は財政的に恵まれていると言える。しかし少子高齢化や人口の減少などの課題を抱える町の前途を考えると安閑としている状態ではない。一部の住民もそれに気づいており、ここ数年で住民グループの活動が盛んになっているのもその現れだと、玄海町役場財政企画課長の古館保弘さんは語る。

「修学旅行生の民泊受け入れは、住民が自分の町を改めて見直すきっかけになりました。まちおこしに大切なのは、まず地元を再発見し、その上で外に対する意識を高めること。それは住民も役場の職員も同じ

クリスマスやバレンタインの時期には、モニュメントのまわりにイルミネーションを施す試みも行われた。「旅行雑誌に広告を出したり、棚田を背景に現地で結婚式を挙げたりと、アピールもいろいろしています。たくさんの方に浜野浦の棚田の魅力を知ってもらうことで、棚田の保全をバックアップできたらと考えています」

です。ATA事業など外部との交流は、その良い手段になります」

交流促進に必要なのは町のPRだが、外に知らせるためにはまず自らが町を知らなければならぬ。歴史・文化、農作物・海産物、料理、暮らしなど様々な要素の中から、町特有の「資源」を発見し、その価値を創造していくのがポイントとのこと。交流は確かに町を活性化させる。だからと言って、ただ交流人口を増やせばいいというわけではないとも古館さんは言う。

「交流は住民を活気づけ、経済的な効果を生み出します。でも忘れてならないのは、交流は手段であって目的ではないということ。目的はあくまで住民の幸せなのです」

点と点を結びいっしょにぶくむ交流の効果

玄海町には浜野浦の棚田、露天風呂・温水プール・レストランを備えた施設「玄海海上温泉パレア」、見て遊んで楽しく学べる「玄海エネルギーパーク」、自然の釣り堀「飯屋湾遊漁センター」や「つりセンター玄海」、蛸の名所である「轟木公園」、数多くの文化財・史跡など様々な観光拠点がある。いちご、キンショウウメロン、上場産こしひかり米、佐賀牛、シロウオ料理などの特産物もある。さらに現在、新しい拠点として「玄海町次世代エネルギーパーク」と「薬用植物栽培研究所」が建設中だ。

「それぞれの『資源』は小さくても、その点と点を結んでいけば大きな資源になります。これを交流によってふくらましていくのです。また交流による新たな価値創造という視点では、物質的な豊かさや心の豊かさの2つの面を考えなければなりません。経済的な振興とともに、住民たちの



玄海町役場 財政企画課
課長 古館 保弘さん

やりがいや希望を創出していきたい」と古館さんは語る。たとえば次世代エネルギーパーク内には、あえて飲食施設は作らず、パークの近くに町民による飲食店を誘致したり、パーク内で食べる弁当を町内の店が供給する。また薬用植物栽培研究所で培った技術を用いて、休耕地に薬草畑を作り、薬草作りを町の新しい農業のひとつに育てる。薬草を薬膳料理や温泉の薬湯に利用し、玄海町の新しい名物として売り出すなど、将来に向けての方策を検討している。

「やはりある程度ビジネスとして成立し、真剣になれるものでなければ、やりがいは生まれてこないと思います。行政としてはいろいろな仕掛けを考え、住民の理解を得ながら一緒に汗をかきながら実施して行きたい」と、古館さんは意欲的だ。玄海町では将来を見据えて、人づくり（教育環境づくり）にも力を入れていく。小学6年生を対象とした

生を対象とした

★玄海町次世代エネルギーパーク(仮称)

風力、太陽エネルギーなどの自然エネルギーをテーマにした施設で、平成24年4月にオープン予定。子供たちが次世代のエネルギーにふれて、日々の暮らしや地域とのつながりに気づき、理解する「学びの場」を創出することを目的としている。たとえば水を電気分解して取り出した水素をエネルギーとして走るカートやバギーに乗ったり、太陽光発電で温めた足湯につかるなど、楽しく体験しながら自然エネルギーについて学べる。



完成予想図

また学習と交流の場であるとともに、玄海町の魅力をアピールする機能も発揮できるよう企画されている。近隣に薬用植物栽培研究所が建設され、連携により集客の相乗効果も期待される。

★薬用植物栽培研究所(仮称)

玄海町と九州大学との共同プロジェクトとしてスタートした「漢方薬の原料・薬草の栽培研究開発事業」の核となる施設。平成23年にオープン予定で、完成すれば日本初の薬草栽培の国産拠点となる。研究施設であるとともに、一般向けの観光薬草園でもあり、薬膳料理や薬草風呂などの開発で観光業、飲食業への波及効果も期待されている。

中心的に栽培する薬草は甘草で、漢方薬のほか醤油・味噌などの甘味料としても多くの需要がある。しかし日本には自生しておらず、中国やモンゴルからの輸入に依存しているため、栽培技術が確立されれば玄海町のオリジナルブランドとなる。他にシャクヤク、トウキ、ステビアなども栽培される予定で、農業をはじめ様々な地域振興に貢献する大きな可能性を秘めている。



完成予想図

豊かな未来へと続く 本物のレールを探し出す

韓国でのホームステイ「玄海町少年の船(旅費の半分を補助)」や、中学生を対象としたアメリカでのホームステイ「中学生海外派遣事業」(研修費の8割を補助)、「奨学資金制度」(大学生なら月額6万円・4年間貸付)が広く活用されている。さらに薬用植物栽培研究所で、中国からの輸入に頼っている甘草の栽培技術が確立した場合の、製薬会社を中心とした

企業の誘致も視野に入れている。「未来に続くレールはいろいろあるけれど、その中で町の幸せにつながる本物のレールを見つければ行政の役目だと思います」と古館さん。町の資源を再発見し、交流によってふくらむ新たな価値を模索しながら明日を見つめるー行政と住民が力を合わせて歩み出した玄海町のことからが楽しみだ。